

浮舟の行方

土田龍太郎

源氏物語にて浮舟と呼びならはせるは、宇治八宮の北の方失せたまひて後、この宮に侍りし中將といへる上臈の産みまゐらせし姫にほかなきなり。父宮のかくれたまひてよりは遠き常陸にて生ひ立ちしこの浮舟、都にては姊なる中君をおきてはかばかしき後見とてなればいともたづきなくあやうげなりしかども、もとよりかたち世にすぐれ心ばせめできことただならねば、薫大將の辨の尼の口よりこの浮舟のことを聞くとひとしく、この姫をば、かつておのが慕ひてやまざりしなき大君の形代にせむと思ひけむ、一たびだにあひ見てしがなの心つきてよりひたぶるに戀ひてやまず、とかくのことありしはてに、この浮舟つひに宇治の里に薫に隠しおかるる身となりたり。これより先、色好みの方にすさめる匂宮、中君のもとに住ゐせし浮舟に屏風のつまより覗きて物言ひかくることありけり。

浮舟のことを初めて述ぶるは、宇治十帖の半ばほどなる寄生卷の中なれども、浮舟一人をめぐりて薫と匂とあひ競ふさまやうやくいちじろくなりもてゆきしかば、浮舟いつしか物語のただ中にありてあたかも關鍵くわんげんを把れるがごとき身となりおほせたり。されば東屋浮舟蜻蛉手習夢浮橋の卷々さながら浮舟物語と名附けむとも苦しからざらまし。

くさぐさのことゆゑありて都に留まれる薫の浮舟にえあひ見ぬままに日を経しころ、ある雪の夜に匂宮のゆくりなく浮舟の隠れ家やを訪ひしは、薫の宇治にあらざらむをりをかねて伺ひたりしにてもやありけむ。このとき浮舟あらがふこともなく宮にかき抱かれて舟に乗り、川向ふの時方の縁者の家にて宮と親しくもの言ひかはして後、次の日夜ふけてはじめてもとの隠れ家に還りけり。

はじめ二人して宇治川を渡りしは、すでに有明の月ののぼりて水のおもて曇りなくなれるころなれど、川中の橋の小島こじまに舟しばしとまりたり。このとき匂宮の

年ふとも變らぬものか立花の

小島のさきに契る心は

といへる歌にこたへて浮舟の詠めるは

立花の小島は色も變らじを

この浮舟ぞゆくへ知られぬ

てふ一首にてなむありける。かつて宇治橋より川下にありけむこの川中島、近き世はずでに水に沈みてあとなくなりたれど、その上は大きな橋の茂れる名所などころにてぞありし。

千世を經ふとも變るまじきわれら二人のとはの契り、今日まのあたりに見ゆる小島に繁るときは木にぞなぞへつべきといへるが匂宮の歌の意こころなるにまぎれなし。そを言ひけつがごと

くに、浮舟おのが歌もて答へけらく、この小島の橘の時移るとも色變へぬはげにさてもこそあらめ、わが身をときは木にたぐへむことさらに思ひよられず。我を求めてやまぬ人のいづかたをもつひのよるべと頼みかねるはてに、ただいたづらになりなむこのうき身にたとへつべきは、宇治川の波に浮びただよへる小舟にほかならで、われもこれよりいづこにはふれさすらひゆくやらむもさらに測りがたければわびしくはかなきことよなきなり。かかるやるかたなき意をこめし一首、ただ匂宮の歌にあへしらへむとてなほざりに詠み出せるにてはつゆあるまじくて、ときは木とはに縁なるをまぢかに見るにつけてわが身のつねなくたよりなきさまのとりかへしせちに思ひ知られぬるぞかしてふ意をおぼえず口ずさめるに疑ひなし。

そもこの浮舟、匂宮に一たびおのが身を委ねし後、薫を思ひ離れたるにてはつゆあらず。一たびだにも薫をあざむきし罪脱れがたくて心の鬼に苛まるることやるかたなければ、さはれ匂を思ひ棄てむもさすがありうまじけり。かたがた斷ちがたく一方に定まりがたくて、この世にはいづく身のおきどころなきままに、黄泉路のほかに辿るべき道なくなるる浮舟の、つひに宇治川の流れに身を沈めてむと闇の中にあくがれさすらへぬるはげに避りがたき成りゆきとこそ云ひつべけれ。

浮舟が宇治川を渡るとき橘の小島の歌詠みしは如月二十日あまりのころにて、入水をはかりしは彌生の末つ方なるめれど、この一月の間に浮舟の心ちちに亂れしこといかばかりなりけむ、今思ひはからむもよしなかるべし。

浮舟の小島見しとき、やがてわが命を棄なむことすでにしかと思ひ定むるまでこそはさすがなかりけめ、いつかわが身をこの川に投げていたづらになしはてざらむも知られずてふあやしき思ひのこのときふときぎして、右の歌もてまほならずほめかさざりしにてもあらじかし。はたしてしからば、この一首、後の卷々につぶさなる浮舟入水の張本なりと云はむともあながち誤たざるべし。

物語の收むる浮舟の詠歌、二十首ほど數へつべけれども、そが中にきはだちてめでたきものとは、手習卷に載れる

袖ふれし人こそ見えね花の香の

それかと匂ふ春のあけぼの

の一首のほかにも求めがたかるべし。これにむかへ見れば、立花の小島の歌、幽玄の方はさしもしるからねども、こめし思ひの深きことなほいみじければ、これまたなほざりに見過すべからず、げに重きこと袖ふれしの歌に亞げりといはでやはあらぬ。ことには、この浮

舟ぞ行方知られぬてふ下の句、一期いちじのあはれもはかなきもここに秘めたれば、かへすがへす心とめではあるべからず。

宇治八宮の弟おとうと姫ひめ、まことの名は知られねども、げにこの一首に因みてぞ浮舟と呼びならはしきたれるなる。

(令和五年三月二十七日受附)